

横本『二体節用集』の研究課題

佐藤 貴裕

近世節用集の研究は、概して初期に手厚くなっている。たとえば、近世節用集の始源である易林本については、古本節用集の一つとして系統・性格・存在意義をはじめ、原刻・平井版・同別版・小山版などの版種、用字・索引など、さまざまな点から考察されている。これに準じるように、易林本から派生した草書本にも版種をはじめとする蓄積があり、これにつらなる元和・寛永期の諸本も系統関係が検討されている。

ならば、今後の研究において近世初期はさておけるかというに、詰めきれていない課題や触れていない問題があり、佐藤（二〇〇八b）に示したような未紹介の異本も他にあることであろう。また、近世初期だからこそ、より確実・詳細で豊かな記述をおこない、次代以降の研究に参照されるべく準備する必要も考えられる。

そこで本稿では、横本『二体節用集』を例にとり、近世初期節用集でのさらなる検討の必要性・可能性を示そうと思う。具体的には、「史上の意義」「諸本の関係」「刊記と消長」「書肆の推定」の各節により、現時点での知見の補足と、新たな解釈を示すこととした。目論見や言及する時期が佐藤（二〇〇八a・二〇〇九a）とかかわるので、合わせ参照いただければ幸いである。

元和・寛永期開版の横本『二体節用集』には、後発の一面七行本もあるが、ここでは先行した六行本を扱う。新たに確認されたものを含めて示せば、元和寛永頃版・寛永三年嘉久版（再摺寛永六年本もあり）・寛永六年版・寛永年間版（刊年数字不刻本）の諸本である。

『二体節用集』は、いくつかの点で近世節用集史上に特徴的な一群として捉えられる。

まず、横本であることが注意される。それまでの節用集は倍の判型の縦本であったが、当時の実用的な書物の多くは横本であったというから（和田恭幸二〇〇一）、より実用向きの外形を装わせて節用集を横本にすることがあってよい。それをまず実現したのは源太郎版『節用集』（元和五（一六一九）年刊）であった。

この源太郎版は、柏原司郎（一九七三）によれば、内容上も工夫があり、ある種の語を削除するという。その分だけ紙数も抑えられるから、多少なりとも安価な節用集として開版できたかと思われる。

いわゆる草書本節用集に比較すると、（中略）難しい語とありふれた語とが主として削除されている。難しい語とは、漢文・変体漢文のために必要であったろうという意味であり、東鑑などに見える「者」が省かれていてのは、象徴的な点である。この傾向は、元和版節用集の随所に見ることができるのである。

源太郎版は行草書一行表示だったが、これに真字（楷書）を添えて真草二行表示としたのが、横本『二体節用集』ということになる。右のような経緯からすると、判型・内容・価格・書体表示のうえから、実用書としての魅力を追求めた節用集の誕生だったのである。

ただ、柏原も別途述べるように、真字を添えた『二体節用集』は二巻ではまず三巻本になった。このことは、寛永期以降の節用集に興味深い影響をあたえた。たとえば、縦本の中野市右衛門版『節用集』二巻（寛永六（一

六二九）年刊。東京女子大学蔵）は、寛永一二年の再版に際してやや強引な形で三巻本に再編されており（佐藤二〇〇八b）、寛永一五年以降の『真草二行節用集』は横本の倍の縦本なので一巻分の厚みが減ったにもかかわらず、三巻仕立てを踏襲するのである。これらのことから、当時「節用集は三巻本であるものだ」との通念が存在していたことが知られる。このような通念を形成しえたのは、三巻本である『二体節用集』のほかにないのだから、『二体節用集』が相当の流行を見たことは容易に想像されよう。流行の要因は、右に確認したような実用書としての魅力に求めてよいかと思う。

右のような流布のレベルからすると、慶長一六年版『節用集』によって始められた真草二行表示も、『二体節用集』によって節用集界に定着したと見てよいだろう。従来もそのように言われることがあったが、単にたびたび再版されたからというだけでなく、不自然な縦本三巻本の存在という論拠から『二体節用集』の流布の「深さ」とでもいうべき状況を指摘しえたのだから、これまで以上に的確・確実に主張できることになる。

これまでの成果を振り返り、再解釈するだけでも右のように新たな知見がえられ、『二体節用集』の史的意義も明らかになるように思われる。単に系統関係の闡明だけでなく、それを基礎として新たな見方を提示することは、近世初期節用集にあってもまだ可能であり、それができる間は検討しつづける必要があるものと思う。

諸本の関係

諸本の関係については柏原司郎が亀田文庫本により検討している。完本は寛永六年版だけで、他は一卷のみの零本ばかりという制約のもと、したがうべき結論をえた。すなわち、源太郎版『節用集』の類から元和寛永頃版が出たとし、これを多少改変したものに寛永三年嘉久版があり、以下、寛永六年版・寛永年間版（刊年数字不刻本）の順に派生したとするものである。ただ、柏原の論考から四〇年近くたとうとする今、現存諸本の広範な調

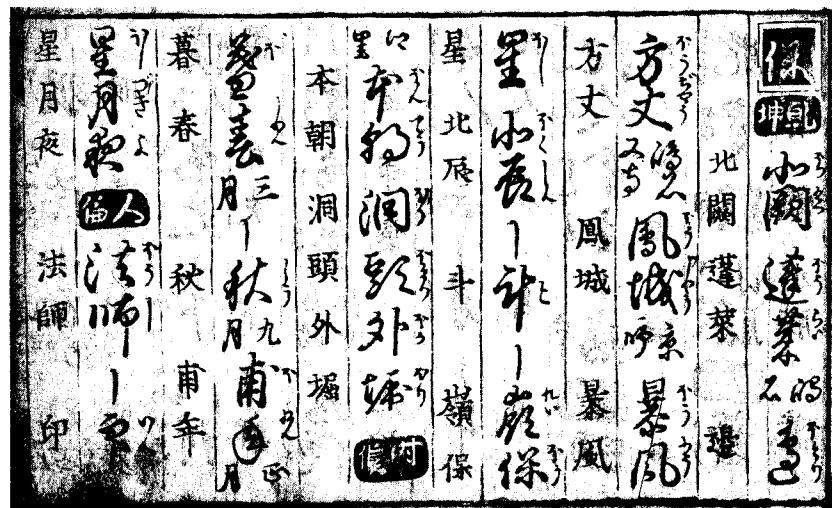


図1 元和寛永頃版『二体節用集』吉田澄夫旧蔵本

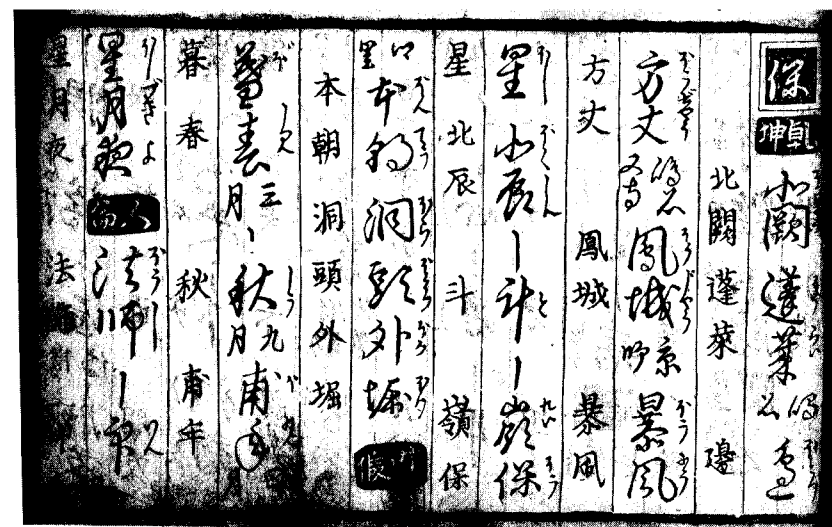


図2 同上 佐藤新収本

查や、未知の異本の発見、全巻を通じた検討、さらにそれらの後になされるべき課題を考える段階にきてもいよう。ここでは、新たに確認できた異本の報告を中心に、若干の考察を示しておきたい。

まず、細かい事柄をまとめて記しておく。『二体節用集』の原拠とされる源太郎版には異版もあるとのことなので（高梨信博一九九二）、『二体節用集』を派生した版種を特定する必要があることになる。元和寛永頃版については、岩瀬文庫本のような完本により全巻にわたる検討が期待される。寛永三年版も同様で、天理図書館本・香川大学神原文庫本などによる検討が必要になる。寛永六年版では、どの丁も四周単辺なのだが、上巻の二三・一四・二一・二二丁にかぎって双辺となるのが注意される。隣り合う丁でのことなので、同一の板木に彫られた分を双辺にしたのだろうか、他の丁と変えた意図を明らかにすることで、これまで知らなかった視点からの記述ができるのではないかと期待する。

寛永三年版再摺寛永六年本は今回新たに確認できたもので、東京大学国語学研究室本・東洋大学本がある。刊記は「寛永三年／六月日 嘉久開板」から「寛永六年／九月吉日」に改められている。寛永六年版と見分けるのは容易で、再摺本は寛永三年版同様匡郭が細く、刊記の「吉日」は二字がそれぞれ一字分に刻されるが、寛永六年版は匡郭が太く、刊記の「吉日」はなぜかほぼ一字分に押しつぶしたように刻されるのである。

筆者は、吉田澄夫旧蔵本・新収本という二組の元和寛永頃版を架蔵するが、版面は亀田文庫本・岩瀬文庫本に劣り、特に新収本は一段劣っている。この新収本では、上巻四八丁・一三・一六丁・二一・二八丁が別の板木による丁に差し替えられている（図2参照）。匡郭が太いため寛永六年版を思わせるが、別のものである。

この新版部分のうち上巻二二丁表を吉田本（図1）と比較すると、四行めの「洞」字付訓の「ら」は、吉田本では「へり」に近いが、近世では普通に見られる形である。一方、新収本では明確な「へり」になっている（注3）。また、時候門の標目の「候」字はともに通常の形ではないが、吉田本のは後刷りの見づらさを割り引けば何とか「候」の

草体と判断される。一方、新収本は「假」に近い別字の楷書に作る。こうした差異を系統上隣接する他本と比較すると、吉田本のは源太郎版に近い形であり、新収本のは後続の寛永三年版に近い形となっていた。したがって、諸本間の関係は、源太郎版から元和寛永頃版が派生し、そのなかに新たな版を含んだ新収本のようなバリエーション^(注4)が生まれ、それを寛永三年版が踏襲したと推定できそうである。

以上、新たな事態をいくつか指摘できたが、再摺や異版挿入などの背後にどのような意図・事情があるのかは、必ずしも明確にはできていない。別途考える余地があるものと思う。

刊記と消長

再摺寛永六年本のように刊年を改刻するのは、古い板木を生かしつつ効率よく新味を演出するものと考えられる。が、我々は、現代の国語辞典が頻繁に改訂されるのを想起し、無意識にも版・刷の異なりが内容の異なりと応じてしかるべきと考えるのだろう。右のような刊年の改刻を、為にすること判断しがちだが、近世にあっては必ずしもそうした意図は強くなかったかもしれない。

としても、ある時点がきたら刊年を改めるとなれば、これはこれで手数のかかることである。そこで、亀田文庫寛永一四年本のように刊年数字をはじめから刻さず、必要に応じて墨書するものが現われるのだろう。同本刊記の「吉日」は押しつぶしたような形なので寛永六年版を元に漢数字のみ削除したようである。ただこのために、削除した跡には漢数字二字の入る余裕はなく、亀田文庫本の「十四」も窮屈な記しぶりになっている。

実際に存在するとはいえ、版本において刊年数字のみを書きするのはやはり不自然である。したがって、亀田文庫本も例外的な存在であって、特殊事情があるようにも思われる。改刻のため数字は削除したが、まだ補刻の埋め木はなされていない校正刷りを何者かが入手し、数字と名前を記したといった事態である。印刷ミスを見

逃された切手や紙幣のように、珍奇なものがただ一本、亀田文庫に蔵されていると考えていた。

ところが、他の所蔵も確認できるのである。筆者は、先の元和寛永頃版とは別に吉田澄夫旧蔵『二体節用集』^(注5)を架蔵するが、この刊記の年数には「十」字が墨書される。また、米谷隆史氏蔵本はより端的で、漢数字が墨書されず、空白のままだという。こうなると、刊年不刻本は決して特別な存在ではなく、広く一般に販売されたものであって、やはり、刊記数字を改刻する手間を惜しむ所為として実行されたのであろう。

とすると、刊年数字を改刻するかわりに墨書するのだから、ある一定量の摺刷の都度、書肆が墨書したものと考えられる。しかし、米谷氏蔵本のように刊年数字が墨書されないものが存在することは、墨書されないまま売られるのが常態であり、購入者が必要に応じて墨書したことも想定すべきように思う。柏原(一九七三a)では亀田文庫寛永一四年本の刊記について「十四」も「三五郎」との署名も同筆かとされるが、これらは書肆によるのではなく、所持者によるものかもしれない。節用集と人々との関係の種々相を明らかにするのも記述研究の重要な仕事だが、その点でも刊年数字不刻本は興味深い事例になるかもしれない。注意したい。

一方、刊年数字不刻という事態を追究していくと、少々厄介なことになる。数字を刻さないのは、つまるところ、古い年記の本をいつまでも店頭に置きたくないからであろう。とすれば、逆に一年間で売りさばかれる冊数はそれほど多くなかったと考えることになる。さきに横本『二体節用集』が大いに迎え入れられたからこそ三巻仕立ても真草二行も定着したと見たが、一考を要することにもなりかねないのである。

とはいえ、不自然な三巻本の存在からして『二体節用集』の流布は動きそうにない。もちろん、たびたびの再版という事実もある。ならば、寛永六年ごろまでは大いに売れていたが、それ以降、売れなくなったため刊年数字の不刻という事態に至ったと考えればよさそうである。たしかに、寛永年間後半では中野版『節用集』(寛永六年刊一巻本・寛永一二年刊三巻本)・杉田良庵玄与版『節用集』(寛永七年刊)・同『二体節用集』(寛永九年刊。書肆

名不記本もあり）・『真草二行節用集』（寛永一五年刊ほか）のような、横本の倍の縦本が相次いで開版される。杉田版『節用集』などは、源太郎版のような行草一行の横本を版下段階で縦本に組み直したものであり（柏原一九七三b）、横本から縦本への推移を象徴する存在となっている。

このような交代劇を、柏原（一九七四）が「二体節用集の衰微と二行節用集の盛行とが、表裏一体の関係にある」と表現したのは卓見であるが、その一体ぶりをいかに的確に説明・解釈するかが問題となる。

ふりかえれば、源太郎版『節用集』も『二体節用集』も、実用書らしさの演出として横本にしたと考えられた。しかし、実用書とはいっても、節用集はイロハと意義で分割された語群の中から、求める語を探し出さなければならぬものである。したがって、一度に見渡せる語数が多いほど都合なのだから、面積の小さい横本は不利なのである。また、面積が小さければ紙数も増えるので、縦本の倍も丁を繰る必要があり、板木から刷りだす手間も増え、一冊分を薄くするために分冊すればしたで製本の手数がかかることになる。このように横本は、他の実用書ならともかく、節用集にあっては利用者にも書肆にも負担をかける判型だったのではなからうか。そうした欠点に気付かれた結果、横本はすたれ、縦本の伸長を許したのであろう。寛永二十一年・寛文三年刊の横本では一面を七行に増やすが、少しでも判型としてのハンデを解消しようとしたものと思われ、右のような推測を裏付けることになる。

『二体節用集』の消長は、再版頻度や諸本の残存状況から推測できるが、ここでは刊記のありようを手掛かりに内実に踏み込み、よりの確できめ細かな解釈を提案できたと考える。

書肆の推定

近世初期においてどのような人物が節用集を編み開版したかは、興味深い問題である。単純には、中期・後期

の編者たちと位相・発想・教養などのうえで同じなのか異なるのかということがあるが、どちらの場合でも説明が必要であって、その分、節用集史の記述が豊かになると期待されるからである。しかし、編者像の解明は必要視されてきたものの、大きな進展を見ていない。筆者も、寿閑本『節用集』の性格付けに際し寿閑について検討したが、ささやかな成果にとどまり（佐藤二〇〇八a）、この種の検討の難しさを実感した。

そこで、この種の検討を続けるために関係分野の業績の収集はもちろん、多様な視点からの考察も必要なので、既知の情報を細大もろさず報告して共有することを考えたい。また、論証すべき可能性なども積極的に提示した方がよい。最終目標を仮にでも提示しておけば、必要な情報も募りやすくなるはずだからである。

そのようなスタンスから、寛永三年版刊記「嘉久開板」の嘉久について、一つの可能性を報告しよう。

寛永版本の書目類から関わりそうなものを拾えば次のようになる。書目によっては「休」字を「久」に誤記するので、岡・和田（一九九六・二〇〇〇）などにより修正した。

嘉久開板

員外沙弥嘉久^{（注6）}

〔洛陽上柳町〕住友勝兵衛尉貞政

洛陽下嘉休刊行

洛上下柳町／員外沙門嘉休

洛陽五条坊門上柳町書林／員外沙門嘉休

平安城五条坊門上柳町／書林員外沙門嘉休開板

洛陽五条坊門上柳町書林／住友喜休

五条坊門上柳町／住友市十郎

『二体節用集』『察病指南』寛永三年刊

『即身成仏義』寛永六年刊

『騷騷全書』寛永六年刊

『孔子聖蹟之図』寛永七年刊

『十住心論広名目』寛永八年刊

『往生要集』寛永八年刊

『浄土法門源流章』寛永一〇年刊

『秘密曼荼羅十住心論』寛永一二年刊。「喜」字はママ

『御成敗式目』寛永一三年刊

「嘉久」とのみ記すのは法号のようで、修行者の意の沙弥・沙門を添えるのに通ずる。用字に「久・休」二様があるが、音によって通用させたか、寛永六年ごろに改めたと解されよう。^(注7)そして、住友姓を名乗り、京都上柳町に住まう人物だが、のちの住友財閥の家祖・住友政友(一五八五—一六五二)がこれにあたる。

住友家初代政友の父権左衛門政行は、柴田勝家の臣として、越前の丸岡で五〇〇〇石を領した住友若狭守政俊の子(あるいは甥)と伝えられている。政友は天正一三年(西暦一五八五)、政行の二男として生まれた。政行夫妻は菩提心が深く、政友は両親の宿願によって京都へのぼり、当時新興の涅槃宗の開祖空源(及意上人)の弟子となり、空禪と称した。空禪は専心仏典の研鑽にいそしみ、ついに空源門下随一の弟子と称せられ、文殊院と号するようになったが、朝廷の帰依を得るまでになった涅槃宗は、他宗の嫉視と幕府の宗教政策から法難を受け、空源が没してから天台宗一派にされてしまった。文殊院はその信奉する法門が他宗に属するのをいさぎよしとせず、還俗して富士屋嘉休と改名し、処世の方便として京都の仏光寺上柳町(現在、仏光寺通り烏丸東入ル)で書林・薬舗を営みつつ帰依する有縁の人びとを教化した。これは寛永年間(一六三〇ごろ)のことで、出版した書籍には、弘法大師の『即身成仏義』、恵心僧都の『往生要集』などの仏書、鎌倉幕府の法典である『御成敗式目』、あるいは馬術・馬病とその療法を説いた『騁駟全書』など、種々のものが伝わっている。(住友商事株式会社社史編纂室一九七二)

ほどよい長さなので社史から引用したが、向井芳彦の一連の論考^(注8)を基にするものである。若干補足すれば、元和五年八月に師・空源が没し、寛永三年には天台僧正が近江坂本に涅槃宗改め天台宗三明院流の本寺として大覚寺を建立、寛永七年以降には政友が還俗・帰商したかと推定されている。古文書などでの呼称の使用は、「員外」は寛永四年八月に、「嘉休」は寛永五年正月にもっとも早い例があるという。

向井は、住友家や縁者の所蔵する古文書類に依拠しており、初期段階では書誌学・出版史の資料は参照しな

かったらしい。たとえば、寛永六年刊『即身成仏義』は「文殊院小伝」(『泉屋叢考』一)・「文殊院の研究」(同二)には見えず、『泉屋叢考』四にいたって「文殊院が僧衣を脱する以前より既に直接書林に關係してゐたことが明らかになったのは、改めて注目すべきことである」と記すほどである。さらに、この記述や社史記事にも表れているように、向井には、書肆の開業を還俗後に設定しようとする見込みがある。ならば、推定される還俗時期より四年も早い『二体節用集』『察病指南』の存在など思いも寄らなかつたであろう。この二書について、向井の論考から直接に参照できるものはなさそうである。

ただ、向井の資料から間接的ながらも重要な事態をさがせば、注目されるのは寛永三年の大覚寺建立であろう。これは、涅槃宗が三明院流としての天台宗への編入を、その本寺の建立という象徴的事実によって決定づけられたことを意味する。これをもって、政友が、古果の行くすえを確かめるとともに、決別の契機としたことは十分に考えられよう。『二体節用集』『察病指南』の出版が寛永三年であるのも、その刊記に涅槃宗時代の「空禪」ではなく、あらたな「嘉久」を刻したのも軌を一にすること捉えて何ら矛盾はない。

このように『二体節用集』寛永三年版の開版者として住友政友が有力な候補であることは確かかと思うが、今後、さらに考証を重ねる必要もある。諸賢の教示を待ちたい。

おわりに

住友政友は「宗内随一の博学大才」と謳われたというから(向井一九五二)、寛永三年版^(注9)だけでなく、これに先立つ元和寛永頃版も彼が関与していた可能性をさぐりたくなる。つまり、政友だからこそ、単なる開版者ではなく、内容・判型・表示法のうえから実用性を明確に打ち出した『二体節用集』の発案者たりえたと考えたいのである。向井によれば、元和三年には師・空源にしたがって江戸にくんだり、その死に際して帰京したのが遅く

とも元和七年という。師の入寂とともに涅槃宗の将来が不安定になりはじめた時期が元和後半になるから、当時の涅槃宗の状況を詳しくみることでは何か得るところがあるかもしれない。

さて、編者・開版者の特定にともなう困難として、すでに必要な情報は存在するのに、不案内な他分野のものなので察知しづらいということがある。学際的な目配りが必要なゆえんだが、本稿では、インターネットの活用が奏功した。寛永版本の目録類で見かける「嘉休」をGoogleで検索して「住友政友」に行きあい、さらにCiniiで小林正彬（二〇〇四）を閲覧、『泉屋叢考』にたどりついたのである。ただ、ネット上の情報は十全ではない。Ciniiでは雑誌論文しか検索できず、それも十分に網羅されてはいない。本書『国語語彙史の研究』のようない論集も対象外である。重要な論者を見落としている恐れはつきまとう。御批正を願う。

本稿では、寛永三年版の開版者の同定を試み、住友政友が早く寛永三年には出版業に手を染めていた可能性を指摘することになった。これは、出版史と経済史の知見を合わせつつ、ささやかながらも経済史側の知見を正しうるものであった。他分野への情報提供は、訓点資料・抄物研究ではしばしば行なわれており、国語学側からの知見がリード役を果たすことも多いと聞く。今後は、節用集研究でもさらなる情報提供ができればと思う。

注

- (1) 正確には「A〈寛永三年版〉も現存E本〈元和寛永頃版〉の類板からとするのがよく」（柏原一九七四。山括弧は筆者の注。以下同）とあり、元和寛永頃版そのものではないが、多少異なるものを想定されている。あるいは、多少の改変は、寛永三年版自体でなされたと考え余地はある。
- (2) ただし、はぎとられた丁があつて、参照できない部分があることになる。
- (3) この行では、相似た平仮名が「へり」二字、「へか変体」一字あるうえ、「へば変体」の後半も似たような形をとる。そこで新版では、差を明確にするためにことさら「へら」に改めたのかもしれない。

(4) 表現上、柏原（一九七四）の「現存E本〈元和寛永頃版〉の類板」（注1参照）と一致しそだが、ここでは元和寛永頃版の上巻での異同そのものを扱っており、柏原の下巻でのことなので、別の事態と考える。

(5) 何者かが巻末付録の「名乗字」以下を一冊にまとめたもので、辞書部分のない零本。

(6) 『即身成仏義』寛永六年版は、奥野彦六（一九四四）に「一、即身成仏義 一冊、中本／為奉報高祖鴻恩蒙貴賤助成、謹以開印板矣、本云元和二（丙辰）曆二月二十一日願主東寺順宗 此点本寛永六年五月上旬令開板、員外沙弥嘉久」とあるに基づく。筆者の調査範囲では所蔵が確認されず、「東寺」を頼りに種智院大学にも問い合わせたが、所蔵しないという。また、他の寛永版本目録は奥野（一九四四）に依拠するので、確認の用をなさない。

(7) 名称は、嘉久（単独）↓員外沙弥嘉久↓員外沙門嘉休と段階的に変化して滑らかである。ただ注意すべきは、新しい要素も合わせもつ「員外沙弥嘉久」が『即身成仏義』にしかなく、かつ、この記述および同書の内容を証明するものが奥野（一九四四）しかないことである（注6参照）。奥野（一九四四）にはまま誤記が見られるので、「員外沙弥嘉久」も「員外沙弥嘉休」が本来の形なのかもしれない（注6参照）。嘉久と嘉休（住友政友）が別人であることも考えられることになる。今後、原本を発見するなどして確認したく思う。

(8) 邦光史郎『住友王国 あかがねの巨人』（サンケイ新聞社出版局、一九七三）も、これに依拠する部分が多くあると思われる。これまで利用されてこなかったような珍奇な資料というわけではない。

(9) 元和寛永頃版と異なる形での改変が寛永三年版で独自になされたとすれば（注1参照）、嘉久の学識が発揮された可能性も考えられる。ただし、寛永三年版での改変は良質とは限らないので注意を要する。たとえば、付録の「分毫字様」は類形字二字について字画の差異を明示するものだが、元和寛永頃版が正しく書き分ける「棟棟」を、寛永三年版では「東」様部分の上部の交差を「又」のように表している。おそらく覆刻に際して、縦画の入筆部分と横画との位置関係を見誤ったのであろう。また、残る下部も「東」と同様に表示しており、「棟」字全体として要領をえない字形となっている。

参考文献

太田正弘（二〇〇三）『寛永版目録』自家版

岡雅彦・和田恭幸（一九九六～二〇〇〇）「近世初期版本刊記集影」（一）～（五）『国文学研究資料館文献資料部調査研究

報告』一七～二二

奥野彦六（一九八二）『江戸時代の古版本 増訂版』臨川書店。元版は東洋堂、一九四四年刊
 柏原司郎（一九七三a）『旧亀田文庫蔵』二体節用集（横本）の版種について『語学文学』一一
 柏原司郎（一九七三b・一九七四）『近世初期』節用集（横本）の改板例『野州国文学』一二・一三
 後藤憲二（二〇〇三）『寛永版書目并図版』青裳堂書店
 小林正彬（一九八五）『住友の誕生——財閥創業者と仏教——』『経済系』一四五
 小林正彬（二〇〇四）『住友の初期多角化——三菱と比較して——』『経済系』二一九
 佐藤貴裕（二〇〇八a）『易林本節用集研究寛書六題』『国語語彙史の研究』二七、和泉書院
 佐藤貴裕（二〇〇八b）『節用集』寛永六年刊本類の本文系統『近代語研究』一四、武蔵野書院
 佐藤貴裕（二〇〇九a）『一七世紀節用集における検索補助法』『国語語彙史の研究』二八、和泉書院
 佐藤貴裕（二〇〇九b）『易林本』節用集』平井版研究の基本課題』『古典語研究の焦点』武蔵野書院
 住友商事株式会社史編纂室（一九七二）『住友商事株式会社史』住友商事株式会社
 高梨信博（一九九二）『近世前期の節用集』『辻村敏樹教授古稀記念』日本語史の諸問題』明治書院
 向井芳彦（一九五二）『泉屋叢考』一〜六（各巻に奥付がないので年次は序・跋年記により示した）
 山田忠雄（一九六一）『開版』節用集（分類）目録』自家版
 和田恭幸（二〇〇二）『近世初期刊本小考』富士昭雄編『江戸文学と出版メディア』笠間書院

〔付記〕 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）『書物・出版と社会変容』研究の総合化に向けて（一橋大学大学院、若尾政希代表）および、同（C）『近世辞書の学際的・言語生活史的研究のための基礎研究』（佐藤貴裕）による研究成果の一部である。